

昭和二十八年七月十一日 初版印刷
昭和二十八年七月十五日 初版發行

昭和文學全集17
大佛次郎集

著者 大佛次郎

發行者 角川源義

印刷者 小田茂作

東京都品川區大井寺下町一四三〇

發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

かじ かほ しよ てん
角川書店

振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙 本州製紙株式會社
クローヌ 日本クロス工業株式會社
印刷所 東日本印刷株式會社
製本所 鈴木製本所

大佛次郎集

昭和文學全集
角川書店版

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

卷頭寫真

筆蹟

歸鄉

乞食大將

幻燈

地靈

詩人

霧笛

解說

年譜

小松伸六

七

一三

一七

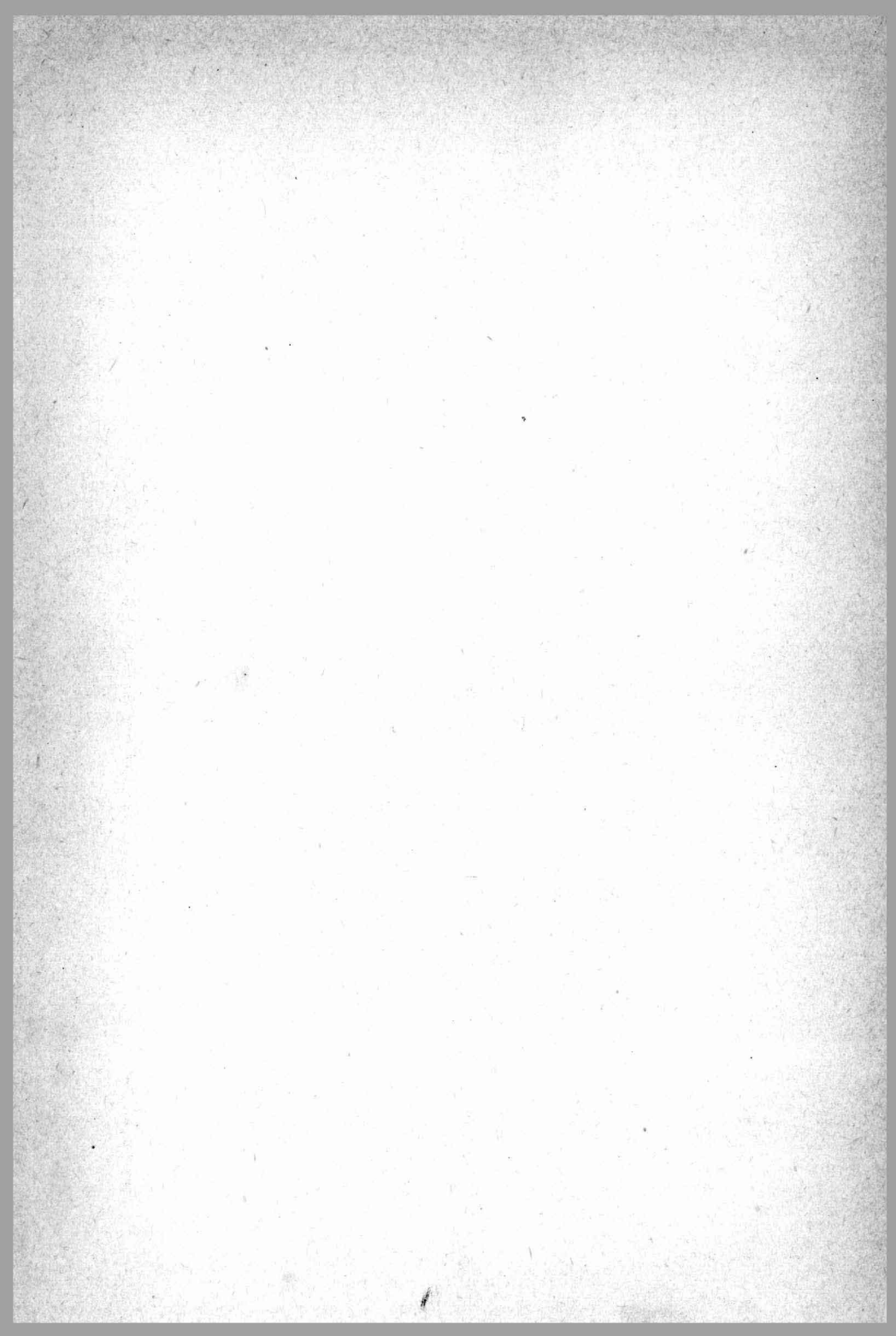
二〇

二四

三五

四〇

四二



大佛次郎集

どこまでも自分の足で歩
かう立ち止ってはいけない
終点は地図の上にないのだ

大佛次郎

歸郷

孔雀

「如何です？」

と、畫家は連れを返り見た。

「なかなか景色の好いところでせう。」

一時間ばかり前に、強いスコールが過ぎて行つた後で、くすんだ赤瓦に白壁の多いマラツカの町は、繁る熱帯の樹々とともに、洗ひ出されたやうに目に鮮やかな色彩を一面に燃え立たせてゐた。雨雲の一部が裂けて、凄じいばかりの日光が降りそそいでゐる。町を縦取つてゐる海は、まだ黒雲の下にあつて、泥繪具で描いたやうに光のない灰色をしてゐたが、これもやがて晴れて来るので、見てゐる間に、青みをさして變化して来る。その青色が、まだ極めて沈鬱な調子のもので、遠景に長く突出してゐる椰子の林ばかりの黒い岬とともに見え、光の氾濫した町を一層絢爛としたものに見せてゐるのだつた。刻々と、その光は動いて、海の上にはみ出して行かうとする。「丁度いい時、来たんですなあ。」と、畫家は向きを變へて、ゆるい坂道を前面に在る昔のキリスト教の寺院が廢墟となつ

て、四方の壁だけ大きく立つてゐるのを見上げながら歩き出した。

丘の斜面の芝原で柄の長い鎌をふるつて草を刈つてゐたマレー人が、二人を見て高野左衛子の日本の着物の姿に驚いたやうに手をやすめて突立つて見てゐた。日本人が出會つて見ても、この南方では、はつとして眺めるほど、純粹の日本の夏姿であつた。いや、昔の東京の町なかでもホテルのロビーにゐる時か、歌舞伎の廊下でも歩く時でない、藝者でない限り、これまでで、大膽に人目を惹く身なりを、しかもきりつとした感じに着こなす女は見られない。

高野左衛子は、内地の生活では洋装一點張りだつたのが、シンガポールへ来るやうにきまると、普通ならば和服に慣れた者も洋装に變へるところを、逆に、日本の夏の着物や帯を揃へて持つて来た女で、落着いた好みに、どこの令夫人かと町で人を驚かさかと思ふと、思ひ切つて派手な白縮緬の染浴衣で、平氣で自宅で客の前に出てゐた。

「驚いてゐますよ。」

「え？」

「いや、あのマレー人の先生が、あなたを見て吃驚してゐるといふんですよ。」

過去にただの磨き方でない時期があつたと知れる。白い顔の皮膚がしつとりと輝くやうなのが、笑つて、

「お化けだと思ふんでせうか。」

「いや、きれいなものは、風俗の違ふ國へ行つても、きれいに見えることは、間違ひない。」

「小野崎さんは、お口がお上手ですから。」

「いや、さうぢやない。」

ブンガ・チナの大きな木が一面に大輪の白い花を付け、雨後のせみで強く匂つてゐるのを見上げてゐた。

その花の匂ひだけでなく、どの木も草も匂つてゐる。土も匂つてゐる。寺の廢墟の内部に入ると、屋根はなく筒抜けの青天井で、四方の壁の隙間にも、小さい木が枝を伸ばして髯を生やしたやうに繁つてゐた。毀れた窓からは青い海が覗いてゐる。

「あら、空っぽ？」

「ポルトガル人が建てたのが、和蘭陀人が攻めて来た時毀してしまつたんですね、古いものなんです。千六百何年つていふから、ざつと三世紀昔のものだ。」

何も無い内陣の石の床に、羅典文を彫刻した平たい大きな墓石が寝かせてあるのが、織田信長の時代に日本に切支丹の布教に來たフランシスコ・ザビエルの遺骸が、この下に一時埋つてゐた位置を記念するものである。その他にも幾つかの同じ形の墓碑が、船の畫や、紋草らしいものや文字を彫刻して残つてゐるが、昔あつた位置もわからなくなつてゐるらしく、壁に立てかけて並べてある。頭蓋骨に、骨を二本組合せて、墓には不似合ひに

感じられる繪もあつた。

しかし、これは左衛子には、あまり興味のないことらしく、あたりを見廻してゐた。外陣の床も草で一面である。小鳥が外の木の繁みに隠れて啼いてゐるだけだ。

「これだけです。」

「でも、いゝところね。」

「いつか来た時は、朝だつたせゐか、蝙蝠フクロウが幾つも飛んでゐましたつけ。」

歴史といふ考へが、畫家の頭に泛んだ。

「最初に、こゝに土人の王朝があつて、そこへポルトガル人が攻め込んで来て城を作つたのを和蘭陀人が来て占領し、その後で英國が手を入れたんですね。それから今度は、日本人が来て……この後は、また、どこの國が来るんでせうかね。黒子のやうに小さい土地だけれど。」

「外の景色がいゝわ。小野崎さん、どこか寫生をなさるの。」

「あなたに待つて頂くのは、お氣の毒ですがら。」

「いゝんです。あたし、アブドラに運轉させて、町の方を見て、いゝ時分にお迎へにまゐりますわ。」

「それア有難いんですが、買物をなさるにしても、もう町には何も残つてゐないでせうよ。」

「女だけで危険なことは御座いますまいね。」
「いゝえ、もう靜かな、人氣のいゝ町ですか

ら。僕なんか、のんきに、ひとりでどこへでも入つて行きますよ。やはり歴史のある古い町ですから、シンガポール邊りの人間ばかりうようよしてゐて人氣の悪い新開地と違ふしとかく小さいんです。自動車でしたら、往來にゐる誰れかを探さうとなさつたら、二十分も走らせたら必ず、どこかで見つかるでせう。そんなに狭い……」

運轉手は、芝刈りのマレー人のところへ行つて、ふたりとも悠長に芝に腰をおろして話し込んでゐた。

「ドラー！」

と、名前のアブドラをちめて澄んだ聲で左衛子が呼ぶと、小腰をかがめて敏捷に、自動車のところに戻つて來た。やがて自動車はエナメル塗の背を光らせながら、ゆるやかに坂を降りて行き、青い樹立の陰に姿を隠した。

「買出したな。」

畫家は、かう思ふのだ。高野左衛子はさういふ女なのである。椰子の林が、黒い火花を連發したやうな形で海を縁取つて、あるデュフイ好みのマラッカの明るい風景や三世紀も昔に日本にも來た耶蘇の坊さまの墓などには興味はない。もつと、彼女は、現世的な本能を働かして動いてゐる。

どういふ由縁があつて、左衛子が海軍の特別の庇護を受け、三十そこそこの若さでシン

ガポールに來て、高級な料亭を開いてゐるのかは畫家もまだ知らずにゐるが、靜かで貴族的な容貌に、目立つて實際的な欲望が組み合はさつてゐると知つても、別に驚かないのたつた。

畫家は、拳闘家のやうな巨きな肩をして見かけは堂々としてゐるが、もう五十に手がとどいてゐて、髪など白い方が多く、青年ばかりの從軍作家の中では變り者扱ひにされてゐたが、その代り、安つぽく驚いたり腹を立てたりするやうな性質はなくなつてゐる。

ほんたうをいへば、その小野崎公平は、自分を畫家だとは思つてゐない。若い時代に畫家として勢ひ込んで佛蘭西に勉強に行つたのだが、巴里に着いて美術館を廻つてゐる間に、最初の一箇月で畫を描くのを斷念してしまつたといふ男であつた。もともと畫家としては頭の冴えた方の男だつたし、古今の大畫家の作品の前に立つて、自分の才能の限度が見えてしまつて、勉強しても無駄だと思ひ込んだのである。それから、段々と身を持ち崩して、ぼん引同様の留學生相手のガイドから寄席の樂屋番までして、日本に歸つても畫を出さずに、美術批評をしたり、畫商の眞似をしたり、新劇の舞臺裏で働いてゐた。そこへこの戦争で、内地にゐては食へないと思つると、急に畫家に戻つて運動して軍屬となつて從軍した。巴里やつてゐたやうに、もぐりの生活法であつた。お座なりのスケッチで、畫

に素人の軍人をだますのは易しかった。ところが、他にすることが何もなかつたといふ事情もあらうが、南方にある間に、ほんたうに自分で畫を描きたくなつてゐるのを知つて、自分が先づ驚いたものだつた。熱情が復活して來たのは、幸福であつた。

命令次第で危険な前線近くまで出ることもあるので、暢氣だが、どこかに死の影を豫覺して、生きてゐる間に何かしたいと思ふやうになつたのかも知れぬ。

このマラッカの町は以前に訪れた時から氣に入つてゐた。色が複雑だし、靜かな環境で、それも、過ぎた歴史の影が、土にも木にも滲み込んでゐるやうな氣配が、文學書なども讀むのが好きだつた私に、暫くでも戰爭を忘れさせてくれるのだつた。

晝家が丘の樹立の間を歩き廻つて、漸く場所を決めて繪具箱をひらいた時分に、高野左衛子は町に在る印度人の貴金屬商の店を見つけてアブドラに自動車を停めさせてゐた。表通りだが狭く汚い町で、その店だつて小さくて、唯一の硝子棚の中には耳飾りの類を貧しく陳列してあるだけで、はだかの土間には、印度人が嘔んで吐き出す檳榔の實の唾が、血のやうに散らばつてゐて、足を入れるのが氣味が悪かつた。

麻の服を着て、鬚のたくましい印度人が、椅子から立上つて、左衛子を迎へた。

「ダイヤモンド、ない？」自由なマライ語であつた。

印度人は、ターバンにつつんだ頭を、横に振つた。

「御座いません。」

左衛子は、獨得の鉛色の顔に白眼が際立つてゐる相手の笑ひ方に、隠れてゐるものを讀み取つてゐた。

「心配ないよ。藏つてあるんでせう。」

「ルビーだけ。」

「ちやア、お見せなさい。」

眞晝の外の光が強烈だから、店の中は薄暗いが、自動車を走らせて風を受けて來た者には蒸暑かつた。左衛子は、日本の扇を帯から抜き取りながら、往來の方を見た。日本人は絶對に通らなかつた。マライ女が華僑の男が歩いて過ぎるだけで、筋向うの店は空家のやうに埃によれて戸が閉つてゐるのは、何の店か、もう賣るだけの商品を失くしたものに違ひなかつた。その屋根の上に、同じ塔を二つ並べた教會らしい建物が伸び上つてゐた。暗綠色に塗つて、青い立木とともに、乾いて佻しい風景である。左衛子は知らないが、ザピエルを記念した寺院であつた。ルビーを數種類見て、黙つて、その一つを言値で買ひ、軍票で支拂ひながら、

「ダイヤ、あるんでせう。」

ルビーは、さう追及する前提として買取つたものであつた。果して印度人の態度は變化

して來てゐた。

「ダイヤモンドは、日本軍が命令で買つて行つたから、なくなりました。」

「でも、一つや二つは、残つてゐるでせう。」

シンガポールでも華僑の店に行けば、ちやんと奥から出して來て見せてくれるのよ。」

「あつても高いです。」

「お見せ。」

たくましく、傲慢に見えた鬚面は、遂に、讓歩の色を見せた。三カラットばかりの大ききのダンヤモンドは、左衛子の華奢な指に捕へられて、皮膚にブリズムの光を散らした。

「もつと大きいのが欲しいわね。」

乞食が左衛子を見つけて、店頭に立つた。

これ以上は瘠せられないといふくらゐに肋骨がむき出して、足の脛など、杖のやうに細い印度人であつた。それと見ると運轉手のアブドラが口ぎたなく叱りつけてから、かねて主人に言ひつけられてゐるとほり、自分が小錢を出して、追ひ拂ふのだつた。

確かにマラッカは小ぢんまりした町であつた。さかり場の廣い通りは、五分も自動車で走ると、カンボン（郊外）の風景となつて、人家がとぎれ椰子の林や畑が現れて來る。床の高いマライ人の住家が見つかつたら、忽ち

「チャイナ・タウン」と、左衛子は、運轉臺のアブドラに云ひつけた。富も物資も南方で

は英國人が去つた後は華僑が一手に收めてゐるからだ。

人家の間を流れるマラッカ川は、掘割のやうに水が濁つてゐて動かない。華僑の町は、その橋を渡つてから、海岸に沿つて長く續いてゐる。それも商店街となつてゐるのは、橋の附近だけで、その奥は、シンガポールあたりの富裕な人たちの、隱宅や、大住宅が軒を並べてゐて、白晝も門の扉を固く閉ざして人通りも稀な閑静な屋敷町が續くのである。建て方は、どれも同じ様子で、瓦屋根に反りを打たせ、壁が白い表構へに、板の厚い塗戸を左右から閉ざした門の眞上には、漆塗りの大きな文字の額を掲げて、

天官賜福

五福臨門

といった風の文字を彫つて朱や碧を塗つた聯を掛けてある。客が外に立つて案内を乞はない限り門をあげないので、内部に住む人の聲も往來に漏れず、この炎熱の白晝に、この町の生活はまるで密封されたやうにひつそりとしてゐるのだ。左衛子のやうな外來者から見れば、空家ばかりの街を見るやうな工合で、ただ自動車を一直接線に走らせるだけのことである。

印度人の店で、左衛子が入れたダイヤモソドは三類であつた。まだ他にも同じやうな店がありさうに思つて窓から探してゐるのだが、城のやうな家ばかりが隙間もなく並んで

ある閑静な町の外觀は、失望に値した。マラッカは金持ちが隠居する町だと聞いたので、寶石商は多いものと期待して來たのだった。「歸りませう。」

左衛子は、丘の上で晝を描いてゐる畫家のことを思ひ出した。

自動車を返して、きつきの橋の附近まで來ると、前方の道路の中央に自動車が停つてゐるのが見えた。自動車は殆ど全部徴發して、軍の日本側の主な機關が使用してゐたこと注意し、左衛子は近寄りながら、その車の乗手に話した。高級軍のキャディラックの新式のものだった。

これがパンクしてゐたので、ダイヤを取換へるので、人は降りて道端の樹の陰に立つてゐた。防暑服の若い海軍士官に、ヘルメット帽をかぶつた背廣の中年の紳士である。先方からもこちらの自動車を注意して見まもつて待つてゐた。

「あ！」と、左衛子は急に、「ドラ、停めて。」

急停車した勢ひに舞立つた埃を、ヘルメット帽に手を掛け顔をそむけて避けた平服の紳士は、セレター根據地の參謀の牛木大佐で、左衛子がこれまで客として觀察して來た限りでは、先任參謀の威嚴を保たうとしてゐるのか無愛想で、うちとけにくい人柄であつた。「パンクで御座いますか。」

大佐は、例の、木の實を嵌めたやうに固い、

きびしい目附で見まもつてゐたが、「君は、また、ここに何をしに來たのだ？」質問の意地悪さを感じながら、「マラッカを見てゐなかつたのですから、報道班の畫家の方に、案内して頂きましたの。」

「見物？」

「ええ、まあ。」にこりとして、大佐の連れの副官の若い中尉の、これは帝大出で、心安くしてゐる方にも會釋を送つた。

「見物の時期でもなからうが、連れはあるんだね。」

「ええ、お仕事をしていたらつしやるんです。」大佐は相變らず棒のやうに突立つてゐたが、

「それで、今日中に、昭南に歸るつもりか。」

「え、店が御座いますから。でも、お車は大丈夫なんですか。御用をお急ぎのやうでしたら、手前どもの差上げでも……」

「いや、それまでのことはない。しかし、單車で夜道になると、途中が危険だから、歸りは急ぐか、どこかで私たちを待つて一緒に行くといふ。晝間はよいが、夜はジョホール邊が近頃、物騒のやうな情報が入つてゐる。」

「何か出るのでせうか。無邪氣らしい驚き方を顔に見せて、左衛子は成功した。

「それア……」と、大佐は初めて笑つて見せて、

「ゲリラも出るが、あの邊は虎の出る。名所

だ。
「可怖く御座いませぬわ。虎でしたら、皆さんのを拜見して慣れてをりますもの。先任參謀は御承知でございますまいけれど、この今西中尉も虎の方では、なかなか有名で御座います。」

若い中尉は、顔を赤くして、
「おい、マダム。」

牛木大佐も笑つて見せたが、何となく別の思念にとらはれてゐるやうな他所他所しい笑顔であつた。

「危険を、その調子で甘く見るからいかんだ。やはり我々について一緒に歸つた方がいい。單車は危険だ。それからだな。ついでのこと、君、これから我々の行くところへ一緒にやつて、ある人に、君の純日本風の姿を見せてやつてくれぬか。」

「どちらへか？」

「固く斷つて置くが、」
結論を下す例の軍人の流儀であつた。

「今日のことは堅く祕密にしておいて貰はぬと、いかぬ。牛木の私用だが、どこへ行つて、どんな人間に會つたか、といふことを、女將の胸にだけ、をさめて置いて貰ふのだ。」

無名氏

平服であるせゐるか、話してゐると、牛木大佐も日頃とは違つて、うちとけた調子を見せた。多勢の部下の前にある時とは氣分が違ふ

のであらう。

「その畫描きさんは、どこで待つてゐるんだね。ほつとくのも、悪からうが、ざつと一時間は待つて貰ふことになる。」

「平氣な方なんです。スケッチを始めるという日中でも、ひとりである人ですから、あたし行つて斷つてまゐつても、いゝのですが。」

「いや、後で副官をやらう。場所さへ判つてをれば、……日本人は、算へるほどしからぬいな町だらうから。」

大佐は、ヘルメット帽の庇が影を置いてゐる顔で沈黙した。いつまでも平然として無表情でゐられる黙り込み方であつた。

「どちらへ、おいでになるので御座います。」
大佐は、木の實のやうな形の目で見返してから、まつたく別の返事をした。

「和服の女なんて、この十年は見たことのない男だらうね。だが、用談があるので、その間は、君にも遠慮して貰ふ。」

「やはり、海軍の方……？」

「いや、さうではない。また、きびしい感じの、話の纏纏のない返事であつた。」

タイヤの修理は終つてゐた。各自の車に戻ると、大佐の自動車に先に、左衛子がたつた今通つて来た道を走り始めてゐた。暑い風が窓から入つて来た。

ヘレン・ストリートと、金屬板に英文で町名が標示してあつたが、白壁に密封されて、門並に固く塗戸を閉ざしたあの華僑の住

宅街である。目的の家が近いことは大佐の車が際立つて速度を落して徐行し始めたので知れた。左衛子が見てゐると、案内役の副官が、窓から首を出すやうにして、一軒づつ、門を見てゐる。そして、自動車は急に停止した。

日ざかりの道路に影を黒く副官が降りた。アブドラが扉をあけて左衛子も降りようとする、若い中尉は眞つ直ぐに歩いて来て、

「暫く、……そのまゝで待つてゐて下さい。」
大佐も降りないで前の車の座席に白色の背中を見せてゐた。中尉だけが、二段の石段を昇つて行き、片側の壁にかけた小さい耳門の呼鈴を押しした様子で、立つて待つてゐた。姿勢はよいのだった。

殆ど人通りはなく、街は岑閑と陽に輝いて静かである。左衛子は、中尉が待つて立つてゐる頭上に、篋がづらの木が繁つてゐて紅い花が壁に垂れてゐるのを見た。自轉車が遠くから走つて来たが、近くなるとこれが日本の陸軍の兵隊で、憲兵の腕章を付けてゐたが、華僑の家の前に停つてゐる自動車を怪しんだ様子で、徐行しながら覗き込むやうに見まもつて通つた。

マラッカの華僑の大住宅は、道路に面して表構へがどれも同じ形式を探つてゐるやうに、家の内部に入つて見ても、様子がほぼ似たものである。

開口は狭いが建物は細長く、奥行きが深い。

へエレン・ストリートに門があると、家の裏手は海の潮に直接に觸れてゐる。つまり、道路と海との間の短冊のやうに細長い地所を、どの家も一杯に塞いでゐるのである。

門内の狭い庭から、すぐに支關の客間に入る。石だたみの床に正面の壁に寄せて黒檀の卓を置き椅子を配してある。奥へ入る戸口は、この壁の左右に在つて、敷居をまたぐと、同じやうな形式の部屋で、またその左右の戸口の奥が、これと同じ工合に、更に後方の部屋に續く。正面の壁には文字の對聯を掲げたものもあるが、寺のやうに佛壇を置いた部屋もあつた。

或る部屋の壁には、祖先から代々のこの家の主人だつた夫婦の肖像を、額にをさめて並べて飾つてある。これは、この家の歴史であつた。最も古いものは、まだ寫眞のない時代なので、彩色した畫像で、それも龍の模様を胸につけた孔雀の翅を帽子につけた清朝の風俗の老人が、髪結び方も違ひ纏足した太太(夫人)が、並んでゐる。寫眞の時代に入ると、服装は南方の氣候に順應した簡略のものになつてゐるが、やがて一、二代で男主人は孫逸仙の寫眞にあるやうに詰襟の洋服を着てゐるやうになり、夫人は、マレー風に更紗のサロンを腰に巻き、襦袢のやうに前で合せる薄い上衣と變化して来る。そして、次の代に來るものは洋服の背廣だ。若夫人だけは現代に入つてもマレー風か、廣東あたりから移入

される今日流行の支那服だ。故國を離れてここに根をおろして以來の家の歴史が、重々しく容を見おろしてゐるのだ。

更に人は、故國中國産の盆石や、夾竹桃の鉢植ゑのほかに、西洋人の彫刻になる童女や馬や犬の大理石像が部屋の裝飾となり、また原色版の、狩獵や競馬の圖が古風な書の額と並んで掲げてあるのを見るだらう。これは、オクスフォードやケンブリッジに留學した若い主人が、飾りのついた置時計などと一緒に英國の土産に持つて歸つたもので、これもこの家の歴史の新しい頁なのだ。

若い主人は、流暢に、倫敦仕込みの本格的な英語を話す。

かうして縦に並んだ居間の奥が、中庭のやうに屋根を抜いて、土間の石の井戸や、かまどのある廚房で、そこから階段が二階にある家族達の居間や寢室に昇つてゐる。大きな木があつて、片側から出た屋根の庇とともに、日蔭を作つてゐて、並んだ水廻りの水に涼しい影を投げてゐる。

下男が取次いで來た牛木大佐の名刺をこの家の若主人が受取つたのは、二階から階段を降りる途中であつた。

若主人は、小肥りの軀に鼠色の背廣を上手に着こなして、頭もきれいに撫でつけて、髪を光らしてゐた。

「日本人?」と、強く問ひ返してから、無言

で廚房の土間を奥に入つて行つた。

内庭を向うから圍むやうにして母屋とは別棟がある。昔マラッカの海が現代ほど淺にならず、貿易がさかんだった時代には、ジャンクをすぐ岸まで寄せて荷揚げをしたので倉庫に用ゐられた建物だが、貿易の繁榮をシンガポール港に奪はれて、マラッカの華僑の家が靜かな隱居所や住宅に變化して以來、用のない部屋となつて一部の屋根は破れたままである。

若主人の葉氏は、その戸口から入ると、「シイサン(先生)」と、呼んだ。

どこも空室で、硝子越しに海が見えてゐるのだが、一番奥の部屋から人の聲が答へた。

葉氏が、その部屋の戸口に立つと、ヴェランダのやうな海に向つてゐる縁から、籐椅子を軋ませて、身を起した人物がある。

「お客さんですよ。日本の海軍の士官。」

葉氏の言葉は英語だつた。手にしてゐた名刺を見たが、中國人であつて、葉氏は漢字を僅かしか知らないで、特に日本人の名刺はよく讀み下せないのである。

無言のまま、その人は立上つて來た。裾の長い、薄青い支那服を着た體格は、南方にある中國人には珍しく肥つてゐて、顔も色白で、頬の肉附よく、柔和な福相であつた。

名刺を受取つて讀むと、急に顔に血の色がさした。若く見えるが、五十前後の年齢らしいが、皮膚が子供のやうに美しく染まつた。

「心配しないでよい。」
と、これも流暢な英語で云つて、

「これは私の古い友人なんだから。多分、この間やつた手紙を見て、訪問して来てくれたらう。ひとりですか。」

「私は知らない。」と葉氏はまだ不安らしい面持で答へた。

「連れがあるかしら? 私は、このカードの男にだけ會ひたいのだが……葉さん、さう話してくれませんか。他の人間がゐたら外に待たせて置いて……構はないから、この男だけ、この部屋に案内して来て下さい。」

「イエス、オーライト。」

若主人の葉氏が出て行くと、男は、名刺を見なほした。柔和な顔に普通でなく烈しく動いたものがあつた。その興奮を抑へると、窓に近寄つて日が一面にあつてゐる海の沖を見まもつた。

海は、この建物の土臺となつてゐる石段の傾下に来てゐるのだが、潮が退いて、近くには泥の洲が醜く現れてゐた。房の内庭に生えてゐる巨樹は、この家の屋根を越えて、太い枝を伸して、熱帯樹らしい大きな形の葉の繁りに、この窓に邪魔な目隠しを付けてゐる。陽はさしてゐながら暗緑色に見え、海の沖は、木の葉の間に挟まつてゐるのだ。涼しい代りに薄暗いこの部屋には、中國風の簡單な寢臺に、大きなトランクが一個、他に數冊の洋書があるだけであつた。

牛木大佐の足音が、廚房の庭を横切つて接近して來た。

屋内に入つて來て、板敷の床に步調の正しかつた靴音は、部屋の入口で停止した。

ヴェランダに立つて海を眺めてゐた人は振り返つた。牛木大佐が、例の強い調子で見まもつてゐるのと丁度目が合つた。

「守屋。」と大佐は押出すやうにして、
「生きてをつたのか。貴様。」

無言のまゝ笑つて、これも強い目で見返してゐたが、

「貴様、か?」と、妙に孤獨な感して、その人は呟いた。

「久振りで、俺をさう呼ぶ奴に出會つたものだ。何年目か知らん。しかし、俺の名を忘れて來てくれたものらしいな。」

「手紙を見て魂消た。それも、横文字で名が書いてあるのでは、びつたりせぬ。キヨウゴ・モリヤとは、誰れかと思つた。」

「何より元氣なので結構だ。しかし、……貴様、もう大佐だと!」

「そんなものらしい。」と、牛木大佐は笑つた。

「だが、貴様、どうしてこんなところにいる?」

「國籍もどこに在るか覺束ない人間が、どこにゐるやうが不思議はない筈だが、しかし、實は流石の俺も驚いたのだ。スマトラのサバン

から船でシンガポールへ入つたらこの戰爭ぢやないか。俺の船はプリンス・オブ・ウェールズが出動して行くのと、港の入口ですれ違つたが、まだ戰爭とは知らなかつた。上陸して、否も應もなく、そのまゝシンガポールに足留めだ。日本の爆撃機が頭の上の空を飛びをつた。海軍機だと思ひ、實に何とも云ひやうのない心持がした。」

「さうだ、守屋。」と、大佐は深く頷いて、
「貴様が、それに乗つてゐなかつたとはいへぬ。」

「そんなことは考へなかつた。それよりも、自分の命のことだつた。俺がこゝで帝國海軍の爆撃で死ぬかも知れぬといふことだつた。運命の奴が、皮肉な、しめくゝりを附けようとしてゐるとしか考へられなかつた。」

「何の爲に、シンガポールに來たのだ。」
「歐羅巴へ歸る汽船をつかまへる爲だつた。實に、それどころか!」と、童顔に苦笑が泛んだ。

「それから、陸上部隊のシンガポールの攻撃だ。死ぬまで日本人に會つても知らぬ顔をしてゐようと決心してゐた俺の前に、兵隊が出て來た。職業軍人だつたら、俺はそつばを向いて通る。しかし、無邪氣な、何も知らぬ子供に切なかつた。歸りたくない日本に無理やり歸らされたのと同じことだつた。いや、あ

るひはそれ以上だつた。」

「日本の兵隊と話したのか？」

「話した。」と明瞭に答へてから、

「しかし、守屋恭吾としてではない。たゞもう、日本語の喋れるエトランジチとしてだ。

それに、あの連中は歐羅巴のどこかへ出遭ふ日本人とは違つて、意地悪く人のことを詮索しようとする。時には、ひどく心を動かされたことがあつた。つくづくと悪い戦争を始めたなあ、さう思はないか、君。」

その話になると、牛木大佐は、この昔の同僚に對しても、急に、顔をきびしくしたまゝ、返事をしなかつた。軍人は、上官の命令で行動するだけだ。相手も、それを知つてゐる筈なのだ。無言のまゝ、かう抗議してゐるやうだつた。

「僕が、歐羅巴に留つてゐるものだつたら、祖國の運命がどう成らうが、もつと平靜に見てゐられたかも知れないだね。しかし、まつたくの偶然でも、シンガポールにゐて、外に出れば一々ぶつかりきうに日本の兵隊を見てゐる、時には言葉交へる。となると、やはり違ふのだ。つらいことだね。この戦争は敗けるね。君はさう思はないか。」

牛木大佐は硬い表情で笑つた。

「何とも云へぬ。」

「……………」

「その話はやめて貰はうぢやないか。」
「さうだ、さうだ、俺は地方人だ。いや、もつと厭々、もう、日本人ぢやないのだから。」

「貴様、海軍に戻つて……死場所を得ようとは思はなかつたか？ 方法もあるやうな氣がして今日も來たのだが。」

「友達の親切として云つてくれたものと考へて置く。しかし、云はしてくれるなら云ふ。公金費消者、横領を働いて外國で失踪した人間を、二度と使ふほど、帝國海軍が、がたがたに成つて來てゐるのかね。」

「そんなことは、貴様に云はせぬ。」

牛木大佐は、顔を朱をそゞいで、怒つた。

しかし、すぐ自制したらしく、
「俺は、事情は聞いてゐた。貴様が、そんな破廉恥の奴ぢやないと知つてゐた。氣性が薄、ひとりで罪をかぶつてしまつたのも、薄、感じてゐたのだ。さうだらう？ 守屋。」

「氣の毒がつてくれるつもりでゐるのかね。」
と、恭吾は靜かな語調で言つた。

「要らぬことだ。十何年も外國に暮してゐると、そんなセンチメンタルな氣持も失くしてしまふものだ。僕はユダヤ人のやうなものだよ。正直に云へば、君と話してゐて、ひどく戸迷ひする。どこか食ひ違つてゐて話がかたくな。辛くも昔を思ひ出して、さうだ。牛木はあの時分のまゝ、眞直ぐに育つて來たんだな、と、こつちのレンズの焦斷を調節してから、君がどこまでも軍人として正氣でさう云つてゐるのだと氣がつくのだ。第一、君は早晩この戦争で死ぬつもりである。軍人の覺悟のことぢやないよ。物の見えなない男ぢやない

から敗戦を豫定して……」
「よせ。」と、鋭く大佐は叱咤して椅子から腰を上げた。

「日本の着物を着た美人を見せてやらう。こんな話をしに來たのぢやない。」

意外な言葉を聞いたといふやうに、守屋恭吾は、牛木大佐の顔を見まもつてゐた。

「君は僕を、どこかへ連れて行くといふのかね？」

「いや、貴様に、日本美人を見せてやらうと思つて、途中で拾つて來たのだ。」

「さうか。連れといふのが女か。しかしそれは後でよいことだ。牛木利貞が參謀になつて來てゐると聞いても別に會ひたいとも考へなかつた僕が、危険を憚らず、あんな手紙を出したのには、少しわけがある。僕が世話になつてゐるこの家の主人のシンガポールの住宅を海軍が何に使ふかの徵發命令が出てゐるのだが、老夫人が病氣で、動かしたら命の危い状態に在るので、何とかして貰へないものかと思つた。料理屋か何かを設營するのだつたら、他の家を代りに提供するから病人を動かさないうで済むやうにして欲しい。必要が萬一むを得ないものなら、病人を移すのに車から自動車を出して貰へまいか？ 御承知のやうに華僑は、自動車も自由に使へないのだから。」

「そんな件なら……貴様をわづらはさんでも

よかつたらうに。」

「いや、さうでなかつた。軍の主計も末端の奴になると、華僑の陳情も聞いてくれぬらしい。」

「引受けた。シンガポールのどこに在る家だ？」

「書いて置いた。これは、恩に被る。外國人として自分が一方ならぬ世話になつてゐながら、こちらからは、何も出来ぬといふのは、苦しかつた。さうして貰へるものと有難い。家長の老夫人のことなので華僑の家としては、實に重大な一族全體の心痛の種になつてゐた。引受けて貰へるのだね？」

「帝國海軍は、そんな、けちなことはせぬ筈だ。確かに牛木が承知した。」

「有難う。たつた、それだけのことで、いそがしい君に迷惑をかけたのは濟まなかつた。殊に、君自身わざわざ遠いところを訪ねて来てくれた親切は、忘れることでない。」

牛木大佐は、窓に木の枝のかぶさつた部屋の鬱陶しきを感じてゐたのである。

「それだけのことか？」と、云つて、
「しかし、貴様、戰爭中ずつと、こゝにやつたのか。」

「いや、こゝに移つたのは最近だ。實は、お願ひしたシンガポールの家をつた。」

「憲兵が煩さいやうなこともなかつたのかね？」

「旅券が中國のものだ。歐羅巴から來たと知

れたら厄介だらうが、この家の主人は無論だが、事情を知つてゐる人々も華僑は口が固いから、お蔭で無事である。しかし君の連れといふのに僕が會つても差支へないかね。」

牛木大佐は答へた。

「口留めはしてある。黙つて平氣で會へばよいだらう。誰れも、守屋恭吾が何者か知つてをらぬ。」

「それも、さうだ。一旦、死んだ事になつてゐる人間だからな。」と、恭吾も靜かな調子で微笑した。

「日本へ歸ると、僕の墓があるさうぢやないか。」

客間は、床に石が敷き詰めてあるし、外光に遠く、空氣が涼しかつた。珈琲と菓子、截ち削つたパイイヤに銀の匙を添へて出た。牛木大佐も人が變つたやうに寛いだ態度である。しかし、守屋恭吾のことを、どの誰れとも、左衛子に紹介しないで左衛子のことだけに觸れた。

「高野女史、昭南で飲屋をやつてゐる。」

「飲屋は、ひどいでせう。」と、大佐に抗議してから、左衛子は、恭吾の方に、

「どうぞ、お出かけ下さいまし。」

この支那服のひとが、日本人だとは、わかつてゐた。名前を知らされなかつたのも、かうして華僑の家にあることも何か特殊の任務を帯びてゐる人と見ただけである。

「なるほどねえ。日本の着物のひとは久振りだねえ。」恭吾は靜かに云つた。

「獨逸の田舎の小さな美術館で、歌麿の浮世繪が出てゐるのを見て、妙に、はつとさせられたことがあつたが……日本人には、やはり日本の着物は、悪くないものだなあ。」

「歐羅巴からお歸りになりましたの。」

「いや」と、牛木大佐の顔を見てから、

「歐羅巴に根が生えてしまつたのですよ。しかし、美しいものですか。巴里あたりも女がお化粧が上手で美人もゐるが……永くゐると、デモンストラチヅのところ鼻について來る。日本人も私くらゐの年配になつて來ると、どうも外國人はどんな美人でも、あくどくて重苦しいやうな氣がして來ると見えてね。」

「だが、日本だつて變つて來てゐる。とにかく、かういふ女性が、この邊まで勇敢に飛出して來る時代だからな。」と、大佐が云つた。

「これから、まだ變つて來るだらう。」

「戰爭がね。」と、恭吾は云つた。

「これが大きく風俗に影響する。勝つても負けてもだ。恐らく、今度で、日本の女も着物を捨ててしまふやうになるのぢやないか。」

左衛子が笑つて云つた。

「そんなことも御座いますまい。好いものはいつまでも残りませうから。」

「わかりませぬね。中國人だつたら別でせうけれど、日本人はすぐ動きまますよ。あまり、